

エメラルド色の風



南太平洋の真ん中あたりにある小さな島に、
一本の「イリイリの木」がありました。

イリイリの木が生きていたのは、
山々に囲まれた珊瑚礁の湾のほitoriでした。

イリイリの木は何もかも大好きでしたし、
みんなもイリイリの木が大好きでした。

イリイリの木は、サファイア色に輝く珊瑚の湾を眺めるのが好きでした。
湾のむこうにそびえたつ滴るような深緑の山々、
旅をしていく白い雲、
どこまでも高く広がる青い空…。

それからイリイリの木は、
変わりやすい島の天気も大好きでした。

湾をぎっしりと銀色に染めるスコール、
雨上がりに空を結ぶ虹、
怒り狂ったような青暗い嵐でさえも、
色とりどりの宝石のように美しいと思っていました。

そして横に延びた豊かな枝と、
日に透けるエメラルド色の葉を抱えたイリイリの木は、
湾に輝く宝石のように美しい姿をしていました。

イリイリの木は木陰を差し伸べるのが好きでした。

海からの心地よい風が抜ける木陰は、
人々にとって憩いの場所でした。

お昼時には日焼けをした道路工事の作業員が集まってきて、
お弁当をひろげました。

彼らが仕事に戻るころ、
若いお母さんが赤ちゃんとお昼寝をしにやってきました。

週末になると子沢山の家族がやってきて、
海水浴の後にそこでゆっくり寝転びました。

時々、恋人の乗る船の帰りを待つ女性がやってきて、
幹に体を寄せて早朝の湾を見つめていました。

イリイリの木は、木陰で人々がくつろぐ姿を見るのが大好きでした。

そして木陰はたいそう気持ちのよい場所だったので、
人々もイリイリの木が大好きでした。

イリイリの木は、さざめく波の音を聞くのが大好きでした。

遠くに碎ける外洋の荒波の音も好きでした。

雨や風が自分の葉を奏でていくのも大好きでした。

そして、

大海原を渡ってきた海鳥や、

海がめの話を聞くのも大好きでした。

イリイリの木は自分がイリイリの木であることを誇りに思っていました。

でも、自分で旅をすることはできませんでしたら、
みんなの話を聞き終わったときにはいつも、
「ああ、なんだか風になって旅をしたようで嬉しいよ、ありがとう」と、
つぶやきました。

イリイリの木はいつでも、どんなお話でも、
たいそう喜んで聞いてくれるので、
みんなも彼にお話をするのが大好きでした。

イリイリの木はみんなのことを大好きでしたし、
みんなもイリイリの木が大好きでした。

ある夜明け、湾で育った若い海がめが
イリイリの木に挨拶をしにやってきました。

その若い海がめは、
外洋に出て冒険をする年頃になったといいます。

海がめがたくさんのお土産話を持ち帰ることを約束すると、
イリイリの木は葉っぱを揺らして、旅の無事を祈りました。

外洋への出口にある岩を越える前に、
若い海がめはもう一度、ふるさとの湾を振り返りました。

それは美しい朝でした。
晴れ渡った朝の空はコバルト色に透き通り、
雲はまっさらな白でした。

その雲が越えていく対岸の山々はしたたるような深緑、
山すそが浸っている珊瑚の海はサファイアブルー。
白い砂浜から海面に突き出る火山岩は豊かな黒、
ほとりに佇むイリイリの木は、
いつものようにエメラルド色の葉を抱えていました。

そしてどの葉にも朝露がたくさん輝いていて、
湾を渡るそよ風までエメラルド色に染めていました。

海がめは意気揚々と大海原へと泳ぎだしました。
湾の出口にある岩を越えると、
生まれて始めて見る南太平洋の海の色は、真っ青でした。
まるで、空を丸ごと飲み込んだ青でした。

珊瑚礁さんごしょうの湾の中は、いろとりどりの砂糖菓子のような世界でしたが、

南太平洋はどこまでも深く、
どこまで潜っても青でした。
豊かな、そしてさまざまな青でした。

太陽の光が筋になって差し込む水中は瑠璃色るり、
それからつゆくさ色、
深さを増して吸い込まれそうな海の底は藍あいの色。

ときどき大群の魚が銀色にきらめきながら、
回りの青をまぶしくしました。
大きな魚は、群青色の影になって通っていきました。
どの青もゆらめきながら、溶け合いながら、
さらにさまざまな青を作り出して見せてくれました。

若い海がめは自分の美しい冒険を、心から楽しんでいました。
時々、島で待っていてくれるイリイリの木のことを思い、
おみやげ話が増えていくことを嬉しく思いました。

そして、思う存分旅を楽しもう、
どこまででも行こうと思ったのです。



若い海がめは潮流にのって、南太平洋を泳ぎ続けました。
一週間たったころ、大海原に漂う立派な流木を見つけました。

流木の周りではたくさんの海鳥や海がめたちが休憩をとって、
おしゃべりをしていました。

おいしかった海草の話、間一髪でサメから逃げた話、
月夜の不思議な海の色。

彼らの冒険話も、心躍るものばかりでした。

しばらく話を聞いていると、また海がめが一匹、
同じ潮流に乗ってやってきました。
その海がめみんなにむかって、泣き叫ぶように言いました。

「島のイリイリの木が、切り倒された！」

湾のほとりに佇むイリイリの木の話は有名だったので、
みんながショックを受けました。

若い海がめは大慌てでその場を去りました。
木が、いつ、どんな風に切り倒されてしまったか…
話の続きを聞きたくはありませんでした。

そして、ふるさとの湾を目指して全速力で泳ぎました。
信じられない。
信じたくない。
何かの間違いに違いない。
イリイリの木に会いたい、早く、会いたい。

泳ぎすぎてヒレがちぎれても、
甲羅が破れてもかまわない、
とにかく海がめは泳いで、泳いで、泳ぎ続けました。

ようやく懐かしい島が見えてきました。

海がめは湾の入り口に突き出した岩と、
豪快に砕ける荒波を抜けて、
ふるさとの湾内に泳ぎ進んで行きました。

山も湾も、変わらぬ姿でそこにありました。

けれども

そしてそこでエメラルド色に輝いていたイリイリの木は、
もう、いませんでした。



湾のほとりは灰色のコンクリートで敷き詰められていました。

木陰を失った地面に真昼の太陽がギラギラと降り注ぎ、
空気は熱せられたまま漂って、しつこくまとわりつくようでした。

そして灼熱のコンクリートの上には、
若いお母さんも赤ちゃんも、
道路工事の若者も、家族連れも、
もう、誰もいませんでした。

珊瑚の海は、同じようにそこにありました。
そして湾の前には、山々が同じようにそびえていました。
けれど海がめには、全てが乾いたコンクリートの色に見えました。
…全てが、元の色を失っていました。

海がめは、イリイリの木がいなくなってしまったことを実感しました。

海がめの帰りを待っていてくれたイリイリの木、
冒険話を聞くことを楽しみに思っていたイリイリの木…。

風を、光を、風景を、そしてすべての生き物たちを、
なにかもを愛して慈しんでいたイリイリの木。
みんなもイリイリの木が大好きでした。
イリイリの木は、そこにいてくれるだけで十分でした。

海がめは、大切な宝物を失ってしまったことを実感しました。

色を失った島の風景は、
涙のむこうににじみました。

そして一度泣き出してしまったら、
どンドン、どンドン、悲しくなりました。

海がめは灰色の風景から逃げるように
外洋に向かって泳ぎだしました。

止まれば悲しみに飲み込まれて、
暗い海の底に引きずりこまれそうで、
必死で泳ぎ続けました。

大波に投げ飛ばされて岩に叩きつけられても、
海がめはただひたすら泳いで、泳いで、泳ぎ続けました。
ただ海は、どこまで泳いでももぐっても、
乾いたセメント色でした。

やがて海がめはくたびれ果てて、
もう、ヒレを動かすことができなくなりました。

体の力を抜くと、
海がめの体はぷかりと水面に浮かび上がりました。

おだやかな波がたゆとい、
浮かんできた海がめを優しく揺らしました。

…どれほどそうしていたでしょう。

悲しみも怒りも、もう、なにも感じられませんでした。

とにかく、海がめはヘトヘトでした。

波に揺られながらぼんやりと遠くを見てみれば、

水平線のあたりでは海と空の境目も、

ぼんやりとにじんできました。

海がめはようやく自分がひどく疲れていることに気がついて、

深く息をつきました。

血のにじむヒレ、ひび割れた甲羅。

海がめは、自分がずいぶん傷ついていたことにも、

ようやく気がつきました。

やがて水平線のむこうから、
小さな雲たちと小波がダイヤモンドのように輝きながら近寄ってきました。

雲を踊らせ水面をはじきながら
大海原を駆け渡ってきたのは、風でした。

そしてその風が通りすぎていくときに、海がめは、
頬を優しくなでられたように思いました。

そのとき、ふいに海がめは思い出しました。

イリイリの木が、みんなの冒険話を聞いた後に
よく言っていたあの言葉…

「ああ、なんだか風になって旅をしたようで嬉しいよ、ありがとう」

海がめには、イリイリの木の弦きが
もう一度聞こえたようにも思えました。

それから海がめは、イリイリの木が見送ってくれた
旅立ちの朝のことも思い出しました。
…あれは、美しい朝でした。

晴れ渡った朝の空はコバルト色に透き通り、
雲はまっさらな白でした。
その雲が越えていく対岸の山々は濡れたような緑色、
山すそが浸る珊瑚の海はサファイア色で、
白い珊瑚の浜から海面に突き出る火山岩は、豊かな黒。

ほとりに佇むイリイリの木は、
エメラルド色の葉を抱えていました。
そしてどの葉にも朝露がたくさん輝いていて、
湾を渡るそよ風までがエメラルド色に染まっていました。

海がめは、今、大海原を駆けていく風も、
あの朝のそよ風と同じようなエメラルド色をしているように思いました。

…イリイリの木は、風になったのかしら。

…海がめはそう感じました。

…イリイリの木は、風になったのかしら。



海がめは大海原を駆け抜けていく風の中で考えていました。

…そしてずいぶん時間をかけてから、
海がめはそう信じることに決めました。

それから海がめは思いっきり伸びをして、
風に微笑みました。
そして、深い深い海の中にもぐっていきました。

大海原を駆け渡るエメラルド色の風は、
もう一度だけ海がめのほほをなでました。

…彼女が深い海に消えて行く、ほんの少し前に…。

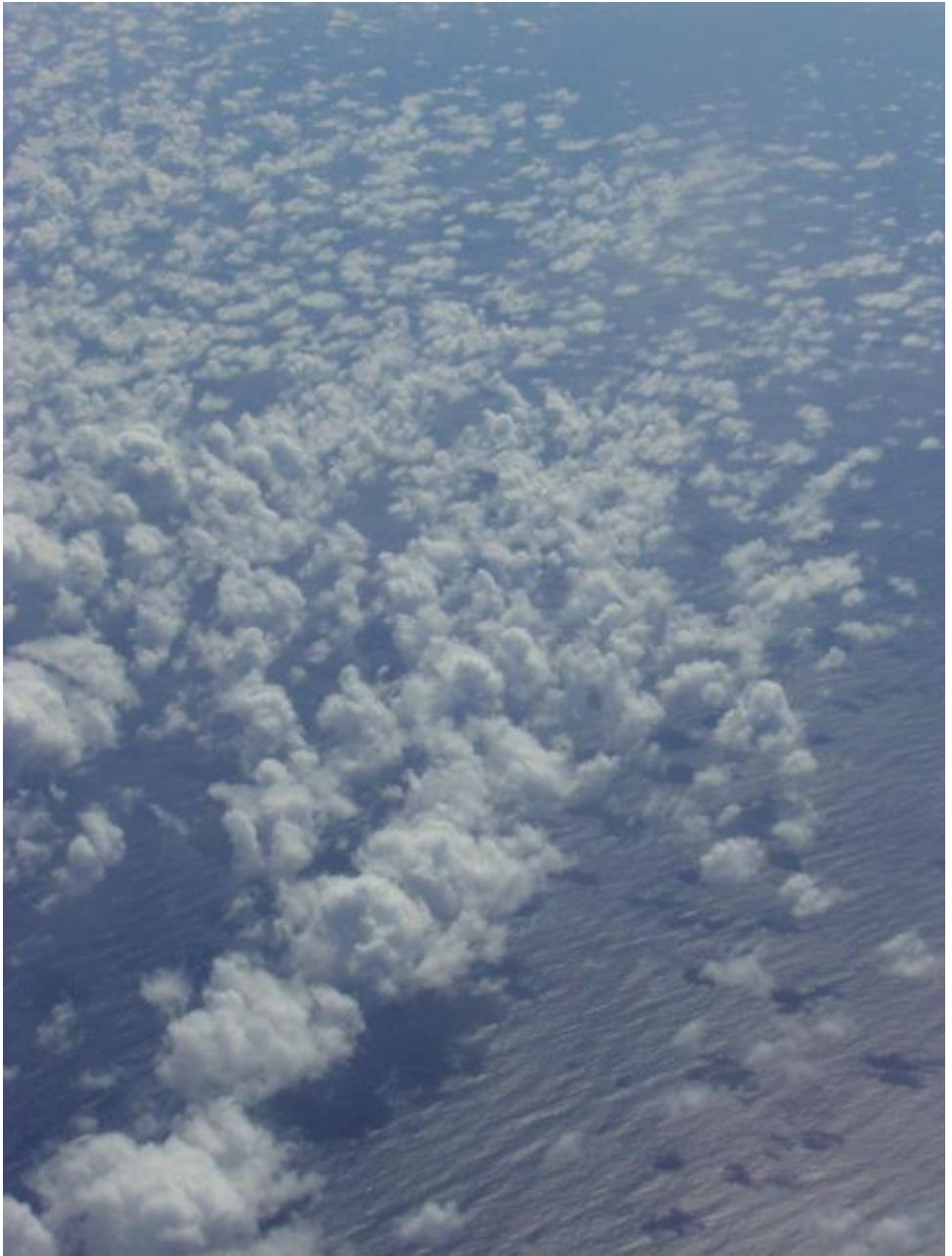
空は青く、どこまでも高く透き通った青でした。

風とともに渡っていく波は銀色に輝き、

旅を続ける雲たちは、群^{ぐんじょういろ}青色の影を海に落としていきました。

そして海は、どこまでもどこまでも、豊かな青に輝きました。

空をまるごと飲み込んだ、青でした。



To the world it was merely a tree but it had the life and the world.

かけがえのない命を生きているのは、木もまた同じ。

2005 / 05 Misako Yanagi
Tutuila, American Samoa



イリイリの木はみんなのことを大好きでしたし、みんなもイリイリの木が大好きでした。